

九州全体の中心としてアジアに向い合う「共創都市」を目指して欲しい。

—— 社団法人九州経済連合会 会長 松尾 新吾氏



松尾 新吾(まつお しんご)

1963年、東京大学法学部卒業後、九州電力入社。熊本支店長、総務部長などを経て、1998年に常務取締役、2003年に代表取締役社長、2007年より現職の代表取締役会長就任。

2008年九州経済連合会副会長就任、2009年より現職。

地域経済に限らず、文化など多方面でリーダーとしてご活躍中。

地の利を活かして発展した25年

福岡の25年前ということですが、私はもう少し遡って時代認識をした方がいいと思っています。数千の歌詞がある鉄道唱歌のなかで九州を歌ったくだりがありますが、「九州一の大都會人口五萬四千あり」と熊本のことを歌っていて、明治20年代は九州の中心は熊本だったことが分かります。地理的にも、政治や行政面でも九州の中心は熊本でした。それがどうして、九州の中心が熊本から福岡へ移っていったのか、全くの私見ですが、主な理由が3つあると考えています。

一つは、中央との距離です。地方が地方でまとまっていた時代、いわゆる幕藩体制が終わりを告げて、明治維新以降中央集権化が進み、地方と中央の関係が深まれば深まるほど、福岡が熊本より東京に近いということが有利に働き、色々な機能が熊本から福岡へ移る要因になったと思います。

次に、港です。これも中央との距離に関係しますが、下関、北九州を含めた博多は、ものが集まりやすく消費地でもありました。他の地域より港の立地が勝っていたことの影響が大き

かったと思います。

3つめは、九州大学の存在です。日本の学校の成り立ちを見ると、高等学校ができて、七帝大ができていきます。当時、熊本には五高があり、帝大も熊本へ行くと多くの人が思っていたことでしょう。しかし、渡辺通りの由来となった渡辺與八郎氏が、それこそ身を投げ打つてもすごい誘致活動をされたことで、結果的に九州大学は福岡へ来ることとなりました。九州大学が知の集積として福岡の発展に果たしてきた役割は大きく、今後も単なる知の集積から産学連携の中心として大きく機能することが期待されています。

これら3つのことがベースとなって、福岡はさほど努力をしなくても、人口の集積が進み発展してきたと思っています。

私は、昭和38年に九州電力に入社し佐世保営業所に配属され、その後、昭和44年に本店の企画室へ配属されました。企画室は、中長期的な九州電力あるいは電気事業のあり方を検討する部署です。ある日、まだ役職もない一般社員だった私は、福岡市役所を訪れ市の将来ビジョンについて尋ねたことがあります。どこの

部の誰だったか記憶していませんが、対応してくれた方は、「福岡は放っておいても発展していて、ついていくのに精一杯で、これからもどんどん発展するに決まっているから、将来ビジョンの必要性は感じていません。」と表現は別として、そういう趣旨の話をされ、それを聞いてそんなものかなと思った記憶があります。当時の福岡の発展のスピードがいかに速かったかを示すエピソードですが、現在も福岡の発展は衰えず続いています。人口を見ると、昭和55年が108.8万人に対し、平成23年で146.3万人ですから、40万人くらい増えています。これは先程述べた3つの理由が根底にあって関連するものだと思っています。

福岡・九州とアジアが共創する25年

先代の鎌田社長が、当時の山崎広太郎市長に福岡市の確たるビジョンを示すよう要請していましたし、当時は企業の長期計画のような具体的なものがなかったように記憶しています。今、25年後を見据えた長期ビジョンの取組みがされていることは、非常に前向きですばらしいことだと思います。

福岡のブランドイメージがないと言われることがあります。裏を返せば、福岡は「何でもあり」とも言えます。例えば、スポーツ面では、野球、サッカー、相撲など色々なものがありますし、ラグビーなどは全国トップリーグで14チームのうち3チームが福岡にあって非常に活発です。そして文化面でも、博多座を中心とした色々な催し物などがあり、文化活動が大変盛んです。福岡県文化団体連合会の会長をしています。福岡市には県の補助金を受けている文化活動グループだけで、地域別やジャンル別に98のグループがあって、それ以外に小唄や清元などたくさんグループがありますから、文化的な素地があるということです。また、海の幸、山の幸も豊富で食べものが非常に美味

しいし、コンベンション施設なども充実しています。とにかく、色々なものがありすぎて、特徴を打ち出せずにいるとも言えます。

そんな状況で何を打ち出していかか考えてみると、一番のキーワードはアジアとの交流ではないでしょうか。アジアとの交流を念頭に置いて私には2つの思いがあります。

一つは、「共創都市」です。今後は内向き半分、外向き半分の心構えでアジアと向き合って共に創っていくことが非常に重要だと考えています。電気ビルの南館が来春完成しますが、新館の名称募集の際、一般応募に混じって私は「共創館」と応募しました。新館をアジアとの交流拠点としたいとの強い思いがあったからです。来春から地元経済8団体が同じ場所に居を構えることとなり、お互いの連携の中で、九州とアジアの双方が活性化する方策を具現化できればと考えています。

もう一つは、「トータルシティ」です。福岡には何でもあって、ないものはないことをアピールし、そんな福岡の位置づけを築くことが必要だと考えています。

道州制の中での福岡の役割

福岡の課題について触れてみたいと思います。九経連では中長期的な課題として、7つのことを掲げています。低炭素社会の対応、アジアとの交流、少子高齢化、産業育成、社会インフラの整備、次世代育成、道州制です。これらはもちろん福岡市のみの課題ではありませんが、福岡市を考える場合、ベースとなり、切り口として、参考になるものだと思います。

インフラの整備に関しては、今、九経連内でも一番喫緊の課題と言えるのが、東九州自動車道です。供用率がまだ5割に達していなくて、途切れ途切れの状態です。福岡市とは直接関係ないという見方をされるかもしれませんが、私はそうではないと思います。福岡の発展は九州

全体の発展なくしてあり得ないものです。九州全体の交流を盛んにするという意味では、東九州自動車道の早期完成は重要な要素であると考えています。

次に空港の問題があります。新規、増設、既設の活用のうちどうするか、議論の末に増設に決まりました。整備が終わるまでこれから10年程度かかると聞いています。十数年前に、空港をもつ自治体間で空港問題を議論する会合があり、当時、九州電力の企画部員だった私はパネラーとして参加し、素人の個人的な思いとして発言したことがあります。福岡空港と佐賀空港はたった50キロしか離れていないので、空港間をリニアモーターカーでつなげば10分くらいで移動ができ、佐賀空港を福岡空港の一部として使うことで、繁閑の問題も解消しうまくいくのではないかと、といった趣旨のことでした。賛同意見もあり、その後、どんな展開を見せるかと思っていましたが、色々な問題があるのでしょうか、なかなか進展していなくて残念に思っています。全国的に空港は大きな問題となっていますが、福岡空港と佐賀空港が連携し、効率的に運用されることで、空港のあり方を示すことができるのではないかと考えています。

県を超えた統合などを考えてみると、そう遠くない将来、道州制に移行するのは間違いないと思います。廃藩置県の大改革で現在の47都道府県につながっていくわけですが、オーバーに言えば、交通手段は人力車、通信手段は伝書鳩の時代に考えられたシステムが、今のスピードの時代に合うはずもなく、九州に7県もは必要ないのではないかと考えています。

福岡が九州のハブ機能を担え

福岡の将来を考えると、アジアとの交流は絶対欠かせないことです。人口減少と少子高齢化が進んでいる日本と比べ、中国やベトナム、インドなど大抵のアジアの国々はすごい勢いで

で人口が増えています。アジアの国々の活力を受け止める役割を福岡が果たし活発な交流をすることで、福岡自身が、そして九州が発展していかなければなりません。

福岡では「よかトピア」などいろんな国際会議が開催されてきましたし、アジア美術館などアジアと絡む多くの文物を観ることができる施設も整っていて、文化交流は得意分野といえます。一方、ビジネス交流はそれほど進まない現状があります。かつてアジアビジネスの拠点として設立されたABC（アジアビジネスセンター）は、収支がとれずに解散しました。しかし、時が移り、アジアビジネスの拠点の必要性の高まりを感じた私は2年前に新ABC構想を提唱しました。以前のABC失敗の原因を分析しながら現在のニーズに合った組織にしなくてはいけないと考えています。

私の夢を語らせていただくと、年間予算5億円で二十数名の陣容となっている九州観光推進機構に劣らないくらいの規模が理想と考えていて、福岡・九州の企業だけでなく中央からもアジアに出たいときはABCに話を持っていった方が早いと言われるくらい、多くの情報やアジアの言葉で語れる人材が集まっている国内外の認知を受けたセンターをイメージしています。将来的には、ビジネスだけでなく、留学生のお世話、あるいは文化交流など、いろんなものを包括したABCのBにとらわれない組織になって欲しいと願っています。

九経連内でも検討委員会をもって議論をしていますが、総論賛成・各論いまいちの状態でなかなか思うように進みません。人材と資金をどうするかが問題になっているわけですが、小さく産んで大きく育ててくれることを願いながら、志と熱意を持って取り組めばうまくいけると考えています。

得意産業でアジアを狙え

福岡がアジアビジネスのハブになるために、いくつかの産業分野での努力が必要だと思えます。まずは農業についてです。九州全体の農業生産額は全国の19%に上り、製造業が8%台であることと比べれば、農業の位置付けが高いことが分かります。このように、九州は農業地域であり、農産物の輸出を積極的に行うことで、大きな未来が開けると考えています。

麻生前知事のきもいりで福岡農産物通商株式会社というものができています。「あまおう（いちご）」など福岡の優れた農産物の輸出をやっけいこうとするもので、関係者も懸命の努力を続けています。香港市場などでは、「あまおう」などの農産物はマル福ブランド（福岡産の安心安全な高級フルーツ）として受け入れられていますので、九州全体の農産物がアジア市場で認知されるような仕組みが確立されることを願っています。

次に、日本の優れたインフラの輸出です。九州地方知事会と九州経済連合会などの地元経済4団体から成る「九州地域戦略会議」という機関があり、ちょうどその分科会のなかで「環境技術・インフラ関係システム輸出に向けた取組」と題して夏季セミナー（7/28～29）をやりましたが、環境技術を念頭に置いたインフラ輸出は有益だと思っています。

最後に観光についてです。福岡は何でもあるといいながら、観光資源は必ずしも豊富とはいえませんが、目玉が少ないところでどうやって観光客に福岡の魅力をつないでいくか大変重要なポイントとなります。

殺風景な港であったり、通関に多くの時間がかかるようことではいけません。快適性やホスピタリティを海外観光客に感じてもらうにはどうしたらよいかということに視点を当てて考えるべきではないでしょうか。多言語の案内板の充実や、アジアの言葉をお話せる通訳案内士

の充実・強化をする必要があると思えます。案内は福岡だけでなく九州全域、あるいは西日本の観光情報が福岡を中心に放射線状に広がっているとか、誰が見ても分かりやすいものにするなどの努力が必要だと思えます。

福岡で半日過ごして、案内板を見て通訳案内士と接すれば、これから行くところのサジェスションを得られるような仕掛けも必要だと思えます。右も左も分からず不安いっぱいやって来る観光客に対して、福岡に滞在することで安心を与えるような九州観光のハブ機能を備えた快適性を追求すべきだと思えます。新たな観光の目玉をつくるよりも、その方が福岡に合っていると思えます。

インタビュー日:2011/7/22 文責:URC 栗原